



TITLE:

クリティカル・シンキングのめざすもの

AUTHOR(S):

岩崎, 豪人

CITATION:

岩崎, 豪人. クリティカル・シンキングのめざすもの. 京都大学文学部哲学研究室紀要 2002, 5: 12-27

ISSUE DATE:

2002-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/50670>

RIGHT:

クリティカル・シンキングのめざすもの

岩崎 豪人

1 論理的思考への注目

近年、「論理的思考（ロジカル・シンキング）」や「クリティカル・シンキング」といった言葉の入った本や、雑誌の特集が書店やコンビニエンス・ストアでもよく見かけるようになった。ビジネスパーソン向けにこうした本や雑誌が出版され、売れているようである。目についたものを列挙すれば、例えば、雑誌では、週刊東洋経済の特集『「論理的思考」で強くなる』（2001年7月号）や、別冊宝島680号『論理思考でビジネスを変える』（2002年9月）、THE21の特別増刊号『「ビジネス思考」を鍛えよう』（2002年11月）、など。書籍では『経営参謀が明かす論理思考と発想の技術』（1998年）、『ロジカル・シンキング』（2001年）『論理力を鍛えるトレーニングブック』（2001年）、『MBAクリティカル・シンキング』（2001年）『クリティカル・シンキングの技術』（2002年）¹など、ここ数年でビジネスパーソン向けの本が続々出版されている。

こうした本が売れている背景には、論理的思考力、判断力が今、ビジネスで求められていることがある。つまり、批判的、論理的に考え、他者の意見を評価、判断し、他人に分かりやすく伝える技術が、国際化の中で要求されていると見てもいいだろう。ただ、そうした能力が欠けているということは、従来の教育方法の問題点を反映しているとも言える。そのことはビジネスパーソンだけに限ることではなく、教育のあり方全般に関わる問題でもある。

知識の伝達を中心とした授業と理解や記憶をみる試験の組み合わせは、いかにポイントを整理して効率よく覚えるかということへ能力を集中させることになる。また、教科書に書いてあること、教師の言ったことを、無批判にそのまま覚えるという態度へと向かわせることになる。むしろ、従来の教育でも、表現を重視してこなかったわけではない。個性の尊重が言われ、他人と違う自分の思いをうまく表現することは、中学、高校の国語教育でも重視してきたはずである。しかし、「国語」で扱う文章は文学作品が多く、情緒的な側面に力点が置かれる傾向にある。論説文なども取り上げられるが、理屈っぽい文章では

あっても、ひねりの利いた（これが好まれたりするわけだが）論理的な文章でないことも多い。新聞のコラムなどはその典型だろう。論理的思考の訓練や、論理的な文章を書く練習は現在の日本の教育では、あまり行われていないのではないだろうか。大学生の書くレポートや論文の多くが、感想文や随筆になってしまうところにもそのことが表れている。大学では、文系の多くの学問分野では、個々の専門分野で論文指導を通じて論理的思考力の訓練が行われるわけだが、きちんとした指導が行われるかどうかは、指導教官の能力にかかってくる。また、教官の方も、学生の数が多ければ、指導する学生全員に基礎から懇切丁寧に教えることは時間的にも難しいだろう。そこで、論理的な思考力をつけずに卒業する学生は少なくないのではないだろうか。

2 哲学、論理学は要請に応じてきたか？

論理的思考の訓練が必要であるとすれば、「論理学」の授業こそがその役割を担うべきものと期待される。しかし、現在の大学では論理学の授業は一部の学生が選択する科目に過ぎず、内容的にも、現実の論理的思考に直接関わる授業は少ない。論理学の授業は、形式論理学（記号論理学）が中心となっており、論理の内容ではなく、主に形式にのみ関わる。「論理学」と名のついた教科書を見れば、ほとんどが命題論理と述語論理を核とした記号論理学から成っていることが分かるだろう。そこで扱われるのは、演繹的な論理であり、論証の妥当性である。論証の妥当性は論証の内容ではなく、形式に関わる。たとえば

AはすべてBである

BはすべてCである。

したがって、AはすべてCである

という形になっていれば、A、B、Cのところにどんなものが入っても内容に関わらず、妥当な論証ということになる。²

論理学の研究は、健全な議論を構成し、適切に推論し、怪しいごまかしの議論の不備を見抜く助けになるものとされてきた。しかし、現代の形式論理学は、非常に高度に発展し専門化し、こうしたもとの観念から大きく離れてしまった。Trudy Govier も言うように、現代の論理学は主として人工的な形式言語の研究であり、「論理学が適切な議論を構成したり理解したりすることや自然な談話に適用できるクリティカルな技能の発達に関係しているという考えは、学生向きの教科書や、論理学教授の大学カリキュラムの委員会での正当化に主として現れるぐらい」であり、「形式論理学が自然言語における実際の論証を

評価する際に我々が必要とする要素をすべてとらえきれないのは、明らかである」³

『論理トレーニング』や『正しく考える方法』⁴などの論理学を日常的な議論に適用させようとする試みもあり、論理学と日常的な議論や推論をつなごうという方向性には賛意を表明したい。しかし、従来の形式論理学をベースとする限りはどうしても、演繹的な推論が中心となり、日常的な推論を十分に把握できないことは避けられない。

現実には我々が出会う問題の多くを判断するには、論理的な妥当性の概念だけでは不十分である。論理的な形式のみでなく、内容に関わる判断が重要なのである。また、我々は様々な事実を観察し、情報を他者から得て、判断を下す。そこで適切な判断を下すためには、論理的な妥当性は必要条件ではあっても、十分ではない。

社会的な問題は人間の行動と密接に結びついているが、人間の行動は複雑であり、そこに確実な知識を求めることは難しい。蓋然的な推論にとどまらざるを得ないのであり、従来の演繹論理中心の記号論理では、こうした蓋然的な議論を十分には扱えない。また、我々は、あらゆる情報を集めてから、ゆっくりと問題を解決するという恵まれた立場にはいない。限られた情報の中で、限られた時間の中で決定を下さなければならないのである。したがって、そこでは理想的で完全な合理性を求めることはできない。限定的な合理性の中で、よりましな決定を下していく他はないのである。

3 ディベートで十分か？

論理的思考の訓練として、「論理学」とは別に注目されるのは、ディベートである。ディベートでは、論理的に立論し、反論することが必要となる。また、論理学とは違って、より現実に関わる具体的なテーマを扱い、議論が戦わされる。そこでは、理由付けのある主張、客観的な意見の構成、理由付けの吟味、検討、反論を考え、反論に答える等が行われ、論理的思考の訓練として実践的に役立つものといえる。

ディベートとは、松本茂によれば「一つの論題に対し、2チームの話し手が肯定する立場と否定する立場に分かれ、自分たちの議論の優位性を聞き手に理解してもらうことを意図したうえで、客観的な証拠資料に基づいて議論をするコミュニケーション形態」⁵である。ディベートにはいくつかの特徴がある。一つの論題に対して肯定側と否定側に分かれ意見を戦わせること（途中で立場を変えることはできない）。肯定側か否定側かは自分の意見と必ずしも一致しないこと（くじで決めることも多い）。立論、質疑応答、反駁など決められたフォーマットに従い、決められた時間の中で交互に論じること。第三者（審査員）が、勝ち負け（引き分けはない）を判定すること。こうした特徴によりディベートは

単なる話し合いや討論とは違い、思考力の訓練としての大きなメリットをもつ。

安藤香織は「ただ知識を蓄積するための学習でなく、学生が「考える力」をつけることが大学や高校の役割として求められていることではないだろうか。ここでいう「考える力」とは試験問題を解く力のことでなく、日常場面で「論理的」「批判的」に考える力である。」と言う。そしてディベートの有効性を次のように言う。「ディベートでは自分の考えを整理して、相手に説明しなければならない。それはふだんの会話のように思いつくままをしゃべればよいのではなく、思考全体を展開して組み立てなおすという作業が必要であり、論理的思考力を必要とする。またディベートでは相手から突然予想外のことを言われたとしても、それに対してすぐに反論を考えなければいけない。常に相手の議論に耳を澄ましなが、聞きながら疑問点を列挙する。これは批判的思考力の訓練として非常に有効である。」⁶

また、特に、日本において、ディベートが討論の練習としての有効性を持ついくつかの理由もある。それは、ディベートが自分本来の意見とは違った立場に立って行われることもあり得るということから生じる。たとえば、死刑廃止の是非というテーマでディベートを行う際に、自分は死刑を廃止すべきだと思っていなくても、死刑存置の立場で論じることもあるし、その逆もあり得る。ディベートはあくまで討論の練習であるから、ある立場に立って、その主張の根拠や相手への反論を考えるのであり、優秀なディベーターは、どちらの立場に立っても説得力のある議論を展開できるであろう。つまり、自分の個人的な意見とディベートの立場は一致していなくてもいいのである。そこで、自分の意見と切り離すことによって議論のしやすさが生じる。日本人の多くは、相手の意見に反論することは、相手を否定するように感じ、自分の意見に反論されることは、自分を否定されるように感じるため、反論はあまり好まれないのだが、ディベートでは、あくまで仮の立場なので、反論がしやすくなる。普段の人間関係においては、なるべく対立を避け、摩擦を回避するのが、日本的な人間関係のマナーであるようだが、ディベートは一種のゲームとしての状況設定をすることによって、他人と意見を戦わすことに対する拒否反応も感じにくくさせる。また、あえて自分と違う立場に立つことによる副次的な効果もある。自分と違った立場を普段は自分とは別のものとして、人それぞれの感じ方の違いとして深く考えず、あまり理解しようとしていなかったが、ディベートであえて自分と違う立場に立つことによって他者理解の促進につながるケースもある。また、自分の意見を相対化することで、自分の意見への批判、検討へ目が向くこともある。

このように論理的な思考の訓練として多くの利点を持つディベートだが、欠点もまたある。John Woods & Douglas N. Walton⁷は、次のように言う。ディベートの主要な目標は、多

数の評価を勝ち取ることであり、必ずしも真理の追究とは一致しない。判定者を説得することに主眼が置かれると、権威に訴えたり、判定者の感情の訴えたりするという手法が使われる。真理であるかどうかはあまり重要でなく、特定の判定者に説得的かどうか、受け入れられるかどうか（できれば熱烈に）が重要となる。

また、ディベートが時間的制約の下で行われることも注意する必要がある。限られた時間の中でどれだけ巧く説得的に述べるか、聴衆である判定者に向かってどれだけ訴えかけるかが大切である。したがって、複雑な論理展開を必要とし、口頭では即座に理解しにくいようなことは使いにくい。しっかりした構成の長い論文を書く能力よりは、短い印象的なプレゼンテーションをする能力が磨かれる傾向が強い。相手の予期せぬ立論や反論に対しても短い時間で応答を考え出すことが必要となる。また、そうした能力を磨くことが、ディベーターには求められる。資料を集め、前もって準備を行うことはできるが、限られた時間の中では、論理的にじっくり反論を考え、追求することは難しい。時間のかかる詳細な検討よりも、短時間でできる印象的な反論へと導かれやすくなる。

ディベートの構造上の問題もある。ディベートはあくまで二つの対立する立場に立って行われ、最後まで、妥協することはない。どちらの立場がより説得的かを第三者である判定者が判定することになる。したがって、互いに意見を交わしながら、妥協したり、歩み寄ったり、より有効な新たなオプションを創造したりするという方向性は、ディベートの構造上できないのである。しかし、現実の問題を考える際には、対立する意見から学びながら、創造的に意見を構成していく過程も重要である。

ディベートは論理的思考の訓練として（日本では特に）有効ではあるが、使い方に気をつける必要がある。あまりに勝敗にこだわったり、判定者へのアピールに力点が置かれたりすると、むしろ論理的ではない思考を身につけてしまうことになる。ディベートの構造上の制限を理解しつつ、論理的な思考を組み立てる訓練として使うことに注意すべきだろう。また、ディベートでは扱えない領域における論理的思考の訓練には別の方法が必要となる。したがって、論理的思考の訓練としてディベートを取り入れることは有効であるが、十分ではないと言える。（逆に、ディベートにとっても論理的な主張を組み立てる理論や技術を提供するという意味で、クリティカル・シンキングの学習は有効である。）

4 クリティカル・シンキングへ向かって

他にどのような方法があるだろうか。ここで今、北米の大学で授業に取り入れられつつあるクリティカル・シンキングに注目したい。クリティカル・シンキングとは、どのよう

なものだろうか。いくつかの定義を取り上げてみよう。⁸

「何を信じるべきか、何をすべきかを決めるかに焦点を合わせた合理的で反省的な思考」(Norris & Ennis)⁹

「観察とコミュニケーション、情報と論証の熟達した能動的な解釈と評価」(Fisher & Scriven)¹⁰

「観察・経験・反省・推論・コミュニケーションから集められ、産み出された情報を、信念と行動のガイドとして、能動的にうまく概念化・適用・分析・総合・評価する知的に訓練されたプロセス」(Scriven & Paul)¹¹

このような定義は、それぞれがクリティカル・シンキングの重要な側面を示しているのだが、圧縮された表現であり、少々理解しにくいかもしれない。むしろ、クリティカル・シンキングが何でないかを具体的に示すことによって裏側から照らし出した方が理解しやすいだろう。我々は毎日、様々な情報にさらされている。それは新たな事実であったり、意見であったりする。新聞や雑誌、テレビやインターネットを通じて、見たり聞いたりしたことをそのまま受け入れ、勧められたことをすべてするというのが、無批判な（クリティカルでない）態度である。もっとも、完全に無批判であることは、現実的にはできそうにない。CMで見た商品をすべて買うという人はいないだろうし、選挙演説を聞いて全員に投票することはできない。夫婦別姓を認めるべきだという意見と、認めるべきでないという意見の両方を同時に受け入れることはできない。結局、まったく無批判に情報や意見を受け入れる人は、一番後に聞いたものに従うことになり、その人の行動は支離滅裂になってしまうだろう。つまり、情報や意見はすべて一致しているわけではなく、我々の選択できる行為も限られているのだから、我々は何らかの取舍選択を行っているのである。では、どのようにしてそれを行うのだろうか。また、どのようにすれば、適切に判断できるのだろうか。ここで、ただ情報や意見を鵜呑みにせずに、批判的に吟味し検討することが必要になってくる。こうした思考がクリティカル・シンキングである。

このような思考の重要性は、日本でも以前から指摘されている。たとえば、岩崎武雄¹²は、「知る」ことを重視して、「考える」ことをしなくなる傾向に警鐘を鳴らす。他人の考えを知ること満足し、他人の考えに同調し、自分では自ら考えているかのように思いこんでしまう危険性を指摘する。そこで岩崎は批判的精神の重要性を説く。批判的精神とは「いろいろな意見に対して、それをただちに信じてしまわずに、一応それを疑ってかかること」、「どんな意見に対しても、はたしてそれが間違っているところはないかと疑って」みることである。

Neil Browne & Stuart Keeley¹³も、思考のスタイルを二つに分類する。ひとつは、「スポンジ・アプローチ」であり、もう一つは「砂金のより分けアプローチ(panning for gold)」である。スポンジ・アプローチは、スポンジが水を吸収するように、出会った情報をすべて吸収していく姿勢である。このアプローチは得られる知識や情報を増すことによって判断の基礎を形成するのに役立つが、情報や意見のどれを信じ、どれを退けるのか、の方法を提供しない。一方「砂金のより分けアプローチ」は、その選択をするために、能動的に質問をしながら（疑問を持ちながら）情報を読み聞く態度である。いわば、書き手と読み手、話し手と聞き手の対話、インタラクティブな関わりがこのアプローチの最も重要な特徴になる。

しかし、注意すべき点は、批判があら探しや非難、否定になることだろう。日本では、批判することが、けちを付けること、否定することと同じものに受け取られやすい。クリティカル（批判的）であることは、単に否定することではなく、建設的、積極的な態度であることを確認しておきたい。また、岩崎武雄¹⁴の言うように、「ただ一切を否定することによって、みずからは批判的態度を取っていると考える傾向」に陥ることにも気をつける必要がある。そうした態度は批判的ではなくむしろ、「ただある一つの意見を盲信して、他に対して徹底的に否定的態度を取ろうとする独断的態度」に他ならない。批判的態度とは「否定のための否定ではなく、むしろ肯定のための否定」であり、「疑いつつも、すべての意見から学ぼうとする謙虚な態度」である。つまり「絶えずあらゆる意見に疑いを持ちながら、冷静にそれを検討し、多くの意見の中から取るべきは取り、否定すべきは否定して、正しい考え方をしていこうとする態度」である。そして、権威に対する盲信、常識に対する盲信とともに、自己に対する盲信にも気をつけるべきである。他人に対して批判的である以上に「自分の意見に対しても、絶えずどこか間違っていないかどうかを反省するだけの批判的精神」が大切である。

Richard Paul¹⁵は、クリティカル・シンキングを2種類に分ける。弱い意味でのクリティカル・シンキングは、自分の最初の信念を擁護する方法であり、強い意味のクリティカル・シンキングは、自分自身の主張も含めてあらゆる主張を検討する方法である。自分の主張を検討することは、必ずしも自分の最初の信念を捨てることではない。信念に基礎を与え強めることもある。重要なのは、誰の意見かではなく、それがよい意見かどうかなのである。

では、なぜクリティカルに考えるべきだろうか。自分が信じたり、することのよい理由をいちいち考えたりせずに、感じるままに好きなように行動して人生を送る方が楽しい人生ではないだろうか。Tracy Howell & Gary Kemp¹⁶は、短期的にはそちらの方が楽だが、長

期的にみれば、悪い決定や不満に満ちた人生になると言い、ソクラテスの「吟味のない生活というものは、人間の生きる生活ではない」を引用しながら、クリティカルに合理的に考えることは「世界を理解し、人々とつきあうことをより容易にする」と言う。クリティカル・シンキングをこのように人生観や生き方と結びつける論者も少なくないが、そこまで踏み込まなくても、より実践的な効用もある。

Neil Browne & Stuart Keeley¹⁷は、クリティカル・シンキングは有効な思考の技術であり、書いたり話したりすることの質を上げ、コミュニケーションをよりよくすると、効用を説く。

William Hughes¹⁸によれば、クリティカル・シンキングの技術をマスターすることが大切であるのは、いくつかの実践的な理由がある。

- 1 我々は、あらゆる種類の情報にさらされているが、その使い方を知らなければ情報は有用でないこと。情報の多くは不完全で一面的であるが、そのことはしばしば明らかでないため、クリティカル・シンキングの技術がなければ、我々は誤った方向へ導かれやすい。
- 2 我々は、結論を受け入れさせようと意図した議論に常に直面していること。政治家、広告会社、新聞の論説委員などあらゆる種類の利益集団が、我々を説得したり、彼らが望むことを信じさせたりしようとする。彼らは自分の利益のためにそうするのであり、そうした議論に対抗する手段をもつことは、我々の自己利益にもかかわる。
- 3 クリティカル・シンキングの技術のマスターは我々に知的な自尊心をもたらすこと。自分の力で考えることができなければ、他人の考えや価値の奴隷になる危険性がある。

クリティカル・シンキングの技術を身につけることは、必ずしもすべての事柄について、常に批判的に考えることは意味しない。むしろ、クリティカルに考えるべき時に考えることができることが、重要なのである。

冒頭に日本で論理的思考やクリティカル・シンキングが、ビジネスの分野で注目されつつあることを指摘したが、そこで言われていることを見てみよう。グロービス・マネジメント・インスティテュートはクリティカル・シンキングは時代の要請であるという。変化のスピードが大きい現代では、「何も考えずに前例に従ったり、型にはまった考え方をしていたのでは、競争に取り残されてしまうことになりかねない。状況を自分の頭で判断することによって新しい方策を見つけたり、柔軟な発想で対応していくことが必要になるのである。・・・さらに今後は論理的なコミュニケーションの必要性も高まってくると思わ

れる。・・・人材の流動化は激しくなり、国内のみならず海外の企業とビジネスを行うことも当たり前になりつつある。そうすると、いままであえて言葉に出して伝える必要のなかったことまでも、伝えなければならなくなる。相手を論理的に説得し、相手の論理を理解できなければビジネスにはならない。そこで重要になってくるのが、論理的に考える力、すなわちクリティカル・シンキングである。」¹⁹

また、寺田欣司はクリティカル・シンキングの重要性を以下のように説明する。「今日のビジネスパーソンは物まねと経験主義を脱却し、独創的で豊かな発想をもち、経営環境を冷静に観察し、ロジカルにものを考え、主体的に問題発見や解決をしなくてはならないのだ。・・・ビジネスパーソンの評価の尺度は、会社への忠誠心とか、協調性などよりも個人の出した成果とそれを支える能力であり・・・どの会社にも通用する能力には、もちろん専門性とか語学力もあるが、基本的な部分は問題解決能力、コミュニケーション能力、ディベート能力、交渉能力などだ。これらは全てクリティカルかつロジカルな思考を求めるもので、これが今日クリティカル・シンキングやロジカルシンキングに注目が集まっている理由でもある」²⁰

5 クリティカル・シンキングの内容

具体的にクリティカル・シンキングはどのような内容を含むのか。実際にクリティカル・シンキングというタイトルのついた本や、教科書を見ると、非常にバラエティに富んでいることが分かる。ただし、日本においてクリティカル・シンキングとして紹介されているものには多少の偏りがあるので、少々、注意が必要である。クリティカル・シンキングは、より広い領域であること、また論理的、哲学的内容を含んだものが少なくないことを指摘しておきたい。

日本で紹介されているクリティカル・シンキングは、認知心理学に基づいたクリティカル・シンキングとビジネスパーソンのためのクリティカル・シンキングの2種類に分けられる。前者は、『クリティカル・シンキング (入門篇・実践篇)』(E.B.ゼックミスタ, J.E.ジョンソン)²¹であり、認知心理学に基づき、人間の思考陥りやすい罠に着目しながら、思考を導く原則を提示している。ビジネスパーソンが仕事を進めていく上で役立つように必要な思考法をまとめたものとして、『MBA クリティカル・シンキング』²²がある。また、両分野にまたがるものとして『クリティカル・シンキングの技術』²³がある。

しかし、英語圏におけるクリティカル・シンキングの教科書をいくつか参照してみると、非形式論理学(informal logic)をベースにおいた本が主流である。²⁴もともと伝統的な論理学

は、適切な推論や判断を行うための学問であった。19世紀になって記号論理学（形式論理学）が生まれ、高度に発展する中で、日常の推論や判断から離れ、抽象化していったのである。非形式論理学は、そうした反省に立ち、実際の日常の議論で陥りやすい誤りを分類し、よい推論の基準を提示しようとする。したがって、非形式論理学は、クリティカル・シンキングの母体と言える。また、1970代以降、論理学の教科書は、演繹論理と帰納論理を中心としたグローバル・アプローチのものから、自然言語に着目し、日常生活における推論とその技術の習得に力点を置くクリティカル・シンキング・アプローチが増えていくようになる。（J.A. Blair & R. H. Johnson）²⁵

非形式論理学の特徴は、日常的な議論の取り扱い、誤謬論の活用、議論の解釈と評価に力を入れることなどが挙げられる。こうした特徴は、クリティカル・シンキングの特徴でもある。ただし、非形式論理学が、研究的側面が強いのに対して、クリティカル・シンキングは、教育的側面に力点がある。また、クリティカル・シンキングは、非形式論理学よりも広い領域を扱っているため、必ずしも非形式論理学＝クリティカル・シンキングというわけではない。ただ、両者の親近性は、非形式論理学の本にクリティカル・シンキング入門といった副題がついていることが多いことから見て取れる。

非形式論理学では、日常的な議論を扱うため、形式論理学のような基礎から一步一步積み上げていくという手法はとれない。現実の複雑な議論を分析する典型的な方法の一つが、陥りやすい過ちを見つけ、分類していくことである。このような方法は伝統的に誤謬論と呼ばれてきた。よくある過ちを識別し、避ける方法を教えることは、非形式論理学やクリティカル・シンキングの手法として代表的方法であると思われる。しかし、誤謬論的アプローチには批判もある。²⁶

まず、Hitchcock は誤謬論的なアプローチをクリティカル・シンキングのコースの進め方として採用しない方がよいと言う。それは次の理由からである。

- 1 ある議論のタイプを使うのがいつ正当で、いつ正当でないかを決めることは難しい。
- 2 誤謬の研究に主として基礎を置くようなクリティカル・シンキングのトレーニングは、学生を過度に批判的な態度を育み、よい議論も誤謬と判断させてしまう。
- 3 誤謬をよく知ることは、議論を構成することを教える際にはほとんど役に立たない。

そこで、Hitchcock は、悪い推論の種類の特徴を教える誤謬論的なアプローチよりも、よい推論の基準を教えることに時間をかけるべきである、と言う。

一方、Blair は、誤謬の短くおざなりな説明や表面的な分析は、むしろ害になるが、優れた研究を使って注意深く行われれば、有益であるという。Blair によれば、クリティカ

ル・シンキングのコースを誤謬論に基づける理由は多くある。誤謬は学生が消化するのにちょうどよい一口サイズの学習の単位を提供する。うまく設計された誤謬についてのコースでは、学生は誤謬がどんなものを理解するだけでなく、判断をする際に、識別力と注意を使うべきことを学ぶ。こうして学生は議論を解釈する際の難しさを認識するようになり、よい議論と論証の基準についても学ぶ、と言う。

Hitchcock と Blair のどちらが正しいかは、誤謬論として何を取り上げ、クリティカル・シンキングのコースとして何を目標とするかによって変わってくる。しかし、Blair の言うように誤謬論をうまく使えば、よい議論と悪い議論の識別や、自分の陥りやすい誤りを避けることができるようになるであろう。あまりに細かい伝統的な誤謬論に入り込む必要はないが、典型的な誤謬を取り上げ考察することは、自分自身の誤りやすいポイントを知る上でも重要である。ただし、必ずしも、誤謬論にのみこだわる必要はない。むしろ、我々がどのように誤るか、誤った判断を下しやすいかは、論理学と言うより、認知心理学のテーマである。Blair の言うように、議論と推理を区別するとしても、現実には我々は議論を構成するために推論するのであり、そこで犯す誤りは結局、構成された議論に反映されることになる。それゆえ、心理学的な研究も、誤謬を考える際には有効である。

日本で紹介されているクリティカル・シンキングでは、そこに力点をおいたものが多く、クリティカル・シンキングとは認知心理学や社会心理学と結びついた認識の偏りや誤りを知り、そうした罠に陥らないようにする技術であるかのように理解されているようである。確かに、認知心理学や社会心理学の成果を使って、間違った推論に陥らないようにすることは重要である。また、伝統的な誤謬論以上に認知心理学の研究は、実際の過ちを避けるのに有効であろう。それゆえ、認知心理学や社会心理学の研究は、伝統的な誤謬論の置き換えあるいは増補改訂版と考えることもできる。

しかし、誤謬論あるいは認知的な罠を認識することは、我々が間違った推論を避けるには有効であるが、それだけでよい推論をできるようになることを保証するわけではない。受動的に議論を分析し、よい議論か悪い議論かを識別するだけでなく、能動的に自分から議論を構成することも必要である。Hitchcock の言うように、そのための基準とトレーニングが必要になるだろう²⁷。誤りを見抜くだけでなく、積極的に、よい議論を構成する技術もクリティカル・シンキングには必要なのである。

6 クリティカル・シンキングの技術

クリティカル・シンキングには、具体的にどのような技術が必要だろうか。Alec Fisher²⁸

は、クリティカル・シンキングのスキルとして、以下の方法を挙げる。「理由と結論を同定する。前提を同定し、評価する。表現と考えを明確にし解釈する。主張の受け入れ可能性、信頼性を判断する。異なる種類の議論の評価。説明と定義を分析、評価、作成する。推論する。議論を作り出す」

また、William Hughes²⁹⁾は、クリティカル・シンキングのスキルとして、(1)解釈の技術(2)検証の技術(3)推論の技術をあげる。解釈の技術とは、文の意味を解釈し、曖昧さを明晰にし、欠けている前提や結論を補い、議論を再構成することである。検証の技術とは、文の異なったタイプに応じて真偽を決めるそれぞれの方法に精通することである。推論の技術とは、推論のタイプ（演繹、帰納、倫理等）に応じて、それぞれ異なった評価法を使って議論を評価することである。

ここで言われる議論の評価や構成とは何を指しているのだろうか。クリティカル・シンキングの第一歩として、多くの教科書が共通して挙げているのは、議論 argument の理解と同定である。日本では、「意見」を主観的な「価値観」の表明ととらえる傾向が強い。また、このようにして表明される「価値観」は「人それぞれ」であり、どれが正しいとか間違っているとかは言えず、それについて同意したり（私もそう思う）、不同意したり（私はそう思わないけど、それもアリだと思う）することはあっても、どちらが正しいかを論じたりすることはない。学生が「価値観」を「価値感」と書くことは多いのだが、この漢字の使い方にも、価値観をどう考えているかが反映されている。価値観は感じるものであり、人によって感じ方が違うのは当たり前で、他人の感じ方にはとやかく言わないし、自分の感じ方にもとやかく言われたくないのである。また、異論を唱えられれば、自分が否定されたように感じてしまう。

このような反応の背後には、個人的な好みの表明と、社会的な問題に関わる主張の違いが理解されていないところにある。たとえば、どのような音楽が好きか、どのような食べ物が好きかには、何ら理由はいらない（ある清涼飲料水のCMのようにノーリーゼンでかまわない）し、人それぞれ違うのは当然でもある。また、それを間違っていると言うことは、その人の感性を否定することのように思われるのも分かるだろう。しかし、少年法は厳罰化すべきである、積極的安楽死を認めるべきである、ゴミは有料化すべきである、という主張は単なる個人的な好みの表明ではない。（このような主張も好みの問題であれば、議論することが無意味になるし、結局、多数決で、多くの人好むものに決まることになる。もっとも、素朴にそのように考えている学生も結構いるのだが、こうした決定の危険性にも目を向ける必要がある）。社会的な問題については、個人的な好みを越えて、あるいは個人的な好みの違いを前提した上で、論じる必要があるのである。（ディベートの論

題になるのは、主にこうした問題である。)

主観的な好みの表明と主張の違いは、主張が理由や根拠を伴うことにある。理由や根拠を伴った主張を議論 argument と呼ぶ。日本語の「議論」は主に複数の人間が話し合うことを意味するが、英語の argument には、「話し合い」という意味と、「理由を伴う主張」という二つの意味がある。argument は理由と伴う主張であることによって、その理由や根拠が適切かどうかを検討すること、その理由から別の結論が導かれぬか、他の理由がないか、等々、他人と論じ合う場が開かれるのである。

議論 argument とは理由＋主張（論理的に言うと、前提 premises＋結論 conclusion）であり、ここから出発すれば、議論の検討が、個人の主観的な好みには落ち着くものではなく、意味があり、実りのあるものであることが分かってくる。では、どのように検討を行うのか。多くの教科書では、まず、議論をしっかりと定すること、つまり、理由と結論がどこかをはっきりさせることから始める。そもそも、理由と結論がないものは、単なる記述か、主観的な好みの表明となり、検討に値しない。逆に言えば、自分で論理的な文章を書くときには、理由と結論をはっきりさせることが重要になる。しかし、実際の議論では、必ずしも理由がすべて明示的でないものも多い。また、様々な隠された前提（想定）assumption が含まれている場合も多い。従って、そうした隠れた前提を見抜くこと、明示化することが必要になる。これは相手の主張に対して反論する際にも有効な方法である。

次に、表現には曖昧さや多義性が伴うため、解釈の技術が必要となる。特に抽象的な言葉を使う場合には、書き手や話し手が意味していることと読み手や聞き手が受け取ることが一致するとは限らない。「クローン技術は自然の摂理に反する」とか「人権は常に擁護されるべきである」と言っているときに、何を意味しているのか具体的に明らかにしていく必要がある。

次に、理由が受け入れられるものか、その理由となっているデータ等は信頼できるのか、別の理由はないかなど、理由の検討が必要となる。Hughes³⁰ は、理由が受け入れられる acceptable、関連性がある relevant、十分である adequate の3つを健全な議論の基準としてあげる。現実の問題で理由としてあげられる事柄には、様々なものがある。科学的な実験結果、統計的なデータ、専門家の証言、過去の経験、類似した事例、費用便益分析に基づく予測等々、それぞれの理由は絶対的な真理ではなく、蓋然的なものであり、それを受け入れることがどこまで理にかなったことか、検討する必要があるのである。

さらに、理由から結論への推論がどこまで妥当で、説得的かを評価する。「論理学」の授業で扱うような、演繹的な推論であれば、その妥当性 validity を判定するのは、それほど難しくない。もっとも実際には込み入った推論になれば実際には簡単にできるものでは

なく、だからこそ論理学の練習が必要になるのだが、原理的には白黒をつけることができるのである。しかし、実際の議論においては、演繹的な推論のみで議論が構成されていることはほとんどない。蓋然的な推論を含む議論においては、その議論がどこまで理にかなっている reasonable であり、受け入れることができる acceptable のかを、それぞれの議論に即して吟味、検討していくことが必要になる。むろん、演繹的な論理もその中で使われているため、演繹的な議論の評価方法もマスターしておく必要がある。

こうした一連の過程は、実際には直線的に進むのではなく、フィードバックを繰り返しながら試行錯誤しつつ、議論を吟味していくことになるだろう。しかし、それぞれの技術自体は、独立に学ぶことができる。先の章で見た、典型的な誤謬や、陥りやすい認知的な罠を学ぶことも、よりより議論を学ぶための手助けとなる。また、他者の議論を評価、検討するだけでなく、自分から議論を構成することも重要になる。自分の作った議論の検討も同様に行うべきだろう。最終的には、議論に基づく論文 argumentative essay を自分で構成して書くことになる。

7 クリティカル・シンキングの射程

このようなクリティカル・シンキングの技術は、今、整備されつつあるが、完全に確立されたものというよりはまだ発展途上にある。教科書によって共通する部分は多いものの、アプローチの仕方や考え方は様々である。哲学的な傾向の強いものから、心理学的な傾向の強いもの、ビジネス向け、看護師向け、子供向け、ハウツー本に近いものまで様々ある。日本ではまだ一部の紹介がなされているだけであるが、もっと広く紹介されるべきであろう。

また、クリティカル・シンキングは、いかに教育するかという教育的観点が強いが、実際の議論の分析はまだまだ研究する必要のある課題である。クリティカル・シンキングの基礎としての、実際の議論や論理の研究もまた必要となる。数学の一分野としての論理学ではなく、適切な推論や判断を行うための学という本来の役割を果たせるように、論理学を拡張することが必要だろう。その際には母体となった非形式論理学の研究とともに、論理学や修辞学の歴史的研究等も重要である。

クリティカル・シンキングが現実の社会問題を考える際に有効であることは言うまでもない。クリティカル・シンキングの教科書の著者の多くが、社会哲学や政治哲学、環境倫理学等に関心を持つ研究者³¹であることから見て取れる。現実の社会に関わる問題を考察する技術を与えるという意味で、クリティカル・シンキングは社会哲学、政治哲学、環

境倫理学等の基礎と考えられる。

民主主義という現代の多くの国家が採用している政治システムにおいて、どのように意志決定をしていくべきかを考えるとき、クリティカル・シンキングは、その基礎でもある。市民として、現実の社会的問題の決定に参加する際にも、この技術は役に立つ。自己利益や好みや感情に流されずに、多数者の暴虐が起こらないように社会的な合意を形成するにも、理を尽くして議論し合うことが必要であろう。

そうすると、このような技術を身につけることは、現代の「教養」として必要なことではないだろうか。市民として必要であるだけでなく、学問の基礎としての重要性もある。大学でどのような専門的学問に進んで行くにせよ、論理的、批判的に考え、論理的な文章を書き、議論することは、学問をするうえで大学生の共通の教養と考えられるのではないだろうか。

ビジネスの場面で今、論理的であること、クリティカルであることが求められているのはすでに見てきたが、さらに、国際社会においては特に価値観の違いを認め合った上で、合意を形成していくべき場面も多くなる。その際には、主観的な感情のぶつけ合いでは解決は図れない。論理的な思考、クリティカル・シンキングがより求められるのである。

註

-
- ¹ 後正武『経営参謀が明かす論理思考と発想の技術』プレジデント社、1998年 照屋華子、岡田恵子『ロジカル・シンキング』東洋経済新報社、2001年 渡辺 パコ『論理力を鍛えるトレーニングブック』かんきビジネス道場、2001年 グロービス・マネジメント・インスティテュート『MBA クリティカル・シンキング』2001年、ダイヤモンド社 寺田欣司『クリティカル・シンキングの技術』オーエス出版社、2002年
 - ² 戸田山和久『論理学をつくる』名古屋大学出版会、2000年
 - ³ Trudy Govier, *Problems in Argument Analysis and Evaluation*, Dordrecht:Foris, 1987
 - ⁴ 野矢 茂樹『論理トレーニング』産業図書、1997 齊藤了文・中村光世『正しく考える方法』晃洋書房、1999
 - ⁵ 松本茂『頭を鍛えるディベート入門』講談社ブルーバックス、1996, p 20
 - ⁶ 安藤香織・田所真生子、『実践！アカデミック・ディベートー批判的思考力を鍛える』ナカニシヤ、2002
 - ⁷ John Woods & Douglas N. Walton, *Argument: The Logic of The Fallacies*, McGraw-Hill, 1982
 - ⁸ クリティカル・シンキングの定義についての詳しい検討は、本特集の吉田論文参照（吉田寛、「クリティカル・シンキング」をどう定義するか）
 - ⁹ Stephen P. Norris, Robert H. Ennis, *Evaluating Critical Thinking*, Midwest Publications, 1989
 - ¹⁰ Alec Fisher and Michael Scriven, *Critical Thinking: its definition and assessment*, Edgepress, 1997
 - ¹¹ Michael Scriven and Richard Paul による National Council for Excellence in Critical Thinking の定義 (2002) <http://www.criticalthinking.org/University/univclass/Defining.html>
 - ¹² 岩崎武雄『正しく考えるために』講談社現代新書、1972
 - ¹³ M. Neil Browne & Stuart Keeley, *Asking the Right Questions - A Guide to Critical Thinking*, Prentice Hall, sixth edition, 2001,

- ¹⁴ 岩崎武雄、前掲書
- ¹⁵ Richard Paul, Linda Elder, *Critical Thinking: Tools for Taking Charge of Your Learning and Your Life*, Prentice Hall, 2000
- ¹⁶ Tracy Bowlle & Gary Kemp, *Critical Thinking A concise Guide*, Routledge, 2001
- ¹⁷ M. Neil Browne & Stuart Keeley, op. cit.
- ¹⁸ William Hughes, *Critical Thinking: An Introduction to the Basic Skills*, Broadview Press, 2000
- ¹⁹ グロービス・マネジメント・インスティテュート、前掲書
- ²⁰ 寺田欣司、前掲書
- ²¹ E.B.ゼックミスタ・J.E.ジョンソン、(訳)宮元博章他 『クリティカルシンキング (入門篇)』、北大路書房、1996 E.B.ゼックミスタ・J.E.ジョンソン、(訳)宮元博章他 『クリティカルシンキング (実践篇)』、北大路書房、1997
- ²² グロービス・マネジメント・インスティテュート、前掲書
- ²³ 寺田欣司、前掲書
- ²⁴ 本特集の「クリティカル・シンキング文献紹介」参照
- ²⁵ J.A. Blair & R. H. Johnson, *Informal Logic: The First International Symposium*, Edgepress, 1980
- ²⁶ 以下の議論は Hans V. Hansen and Robert C. Pinto, *Fallacies*, Pennsylvania State University, 1995所収の Hitchcock と Blair の論文による。David Hitchcock, "Do The Fallacies Have a Place in the Teaching Reasoning Skills or Critical Thinking?", J. Anthony Blair, "The Place of the Teaching Informal Fallacies in Teaching Reasoning Skills or Critical Thinking"
- ²⁷ こうしたアプローチを積極的に採用しているものとして、Anthony Weston, *A Rulebook for Argument*, Hacket Publishing, 1992 と William Hughes, op. cit. を挙げておく。
- ²⁸ Alec Fisher, op. cit.
- ²⁹ William Hughes, op. cit.
- ³⁰ William Hughes, op. cit.
- ³¹ Nicholas Capaldi, *The Art of Deception: An Introduction to Critical Thinking*, Prometheus Books, 1987, Tracy Bowlle & Gary Kemp, op. cit., William Hughes, op. cit., Anthony Weston, op. cit. 足立幸男『議論の論理－民主主義と議論』木鐸社、1984

(関西学院大学 非常勤講師)